

中国新石器時代の祭祀形態

ト 工

はじめに

I 祭祀遺跡の発見

II 祭祀の方式

III 祭祀の種類

おわりに

は じ め に

『春秋左氏伝』には「国の大事は祭祀と戦争である」と記されている。特に『礼記』と『儀礼』には、漢代までのさまざまな祭祀について、何時ごろ、何処で、どのような祭具を使って、何を祀っていたかということが詳細に記されている。しかし、中国の文献は、最も古くとも西周時代以前、すなわち紀元前1100年以前にさかのぼらない。甲骨文字でもその絶対年代は紀元前1400年を越えない。従って、もし中国古代の祭祀の源流をそれ以上にさかのぼって研究するには、考古学の方法によるしかないのである。

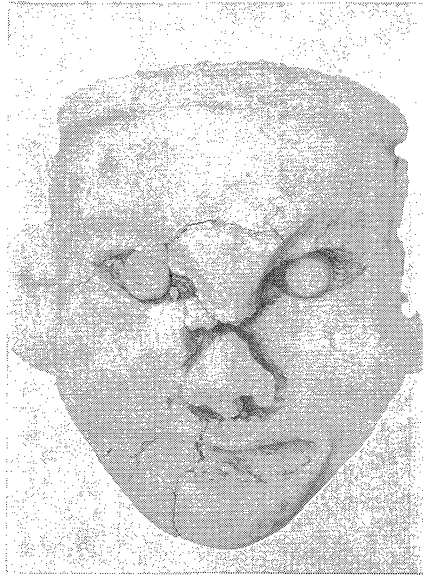
中国考古学は、1921年にスウェーデンの学者アンダーソンが中国河南省仰韶村の遺跡を発掘して以来、現在に至る約70年の間に、radiocarbon-datingをはじめとする科学的方法を採用して、長足の発展を遂げた。そのおかげで伝説的な夏王朝以前の先史時代（旧石器時代と新石器時代）諸文化の状態や編年などが次第に判明してきた。特に、最近15年ほどの間に、中国新石器時代の考古学資料は泉が湧き出るように出土したので、中国考古学者達は、外国人との学術交流を盛んにしていろいろな新しい方法を受け入れ、広く新石器時代文化の細

部にわたる究明を始めた。その結果、中国では考古学研究がきわめて活発になり、新しい思想と新しい方法による論文が数多く発表されている。現在、中国考古学界は黄金時代を迎えていると言っても過言ではない。新石器時代の祭祀に関する研究はその一環をなしている。

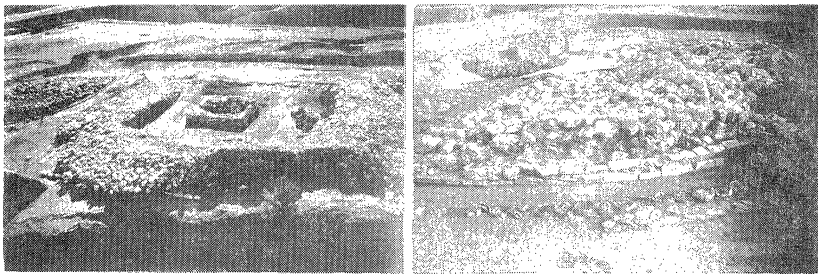
I 祭祀遺跡の発見

すでにアンダーソンは中国先史時代の祭祀に注意し、その有名な著作『黄土地帯』において、甘粛省狄道県の半山遺跡から出土した彩陶の紋様を呪術的表象として指摘している⁽¹⁾。陝西省西安の半坡遺跡が発掘されると、新石器時代の祭祀はさらに注目されるようになった。例えば半坡遺跡第1号住居の床下から発見された人間の頭骨には、礎石を定める奠基儀式のために殺された痕跡がうかがわれる⁽²⁾。また半坡遺跡の彩色土器に見られる人間絵図には、当時の祭祀との関係がうかがわれる。しかしこれは分散的・表面的な現象に過ぎなかった。

このような状況を変化させたのが、80年代に発見された東北地方の紅山文化である⁽³⁾。その最も有名なのは東山嘴と牛河梁の遺跡である。東山嘴遺跡は遼寧省喀左県に属し、1979年5月に発見され、1979と82年の2回にわたって発掘された。それは山を背にした南向きの台地にあり、標高約353m、縦約60m、横約40mである。南北2部分からなり、南部は直径2.5~4mの四つの円形の土壇で、周囲が石で囲まれている。土壇付近から、腹部が膨れて臀部が大きい妊婦の裸体立像が2体発見されたが、これが、現在のところ中国最古の土製人像である。北部は縦11.8m、横9.8mの大きな石造りの基台で、この基台の中央にはほぼ楕円形の石群が三カ所あり、基台の両側に石壁が残っている。南部の土壇と北部の基台は、いずれもおそらく祭壇であろう。牛河梁遺跡は、喀左県より南方の凌源県と建平県の間にある。それは1981年に発見され、1983年から発掘されている。この遺跡ではいわゆる「女神廟」が発見された。「女神廟」は半地下式で、平面はt字形をなし、北側の主室と南側の付属部分からなる。



〔図版一〕 牛河梁「女神廟」から出土した像



〔図版二〕 牛河梁祭祀遺跡の方形と円形の祭壇

主室は多室で、その中から彩絵土製人像破片が多数出土した。頭、肩、手、乳房などがあり、少なくとも6個の個体の分量があった。最も小さい人像の頭の大きさは現代人と同じくらいで〔図版一〕、大きいのは約3倍ある。付属部分は小さい単室の半地下式で、内部から彩色壁画が発見された。「女神廟」の周囲には東山嘴同様の方形や円形の大きな基台が10数カ所発見されている〔図版二〕。その基台の上には祭具が多く見られたので、これは明らかに祭壇である



〔図版三〕 牛河梁祭壇から出土した祭具


〔図版三〕。これらの発見によって新石器時代の祭祀遺跡が確認されたのである。

東北地方に紅山文化のような祭祀遺跡が発見されたことにより、黄河流域を中心とする中原地方にも祭祀場があったと推測してよいであろう。その例として河北省武安県の磁山遺跡を取り上げよう⁴⁾。

磁山遺跡は1976年に発見され、1978と86年の2回にわたって発掘された。発掘された面積は約3300m²で、500個以上の土坑が発見された。そのうち、80個の底部に農作物、2個の底部に野生植物の種が発見された。また多くの土坑の底部から犬と豚の完全な骸骨が発見され、日常生活用の土器も多数出土した。さらに重要なことは、この遺跡では45ヶ所に石斧、磨盤、土器がきれいに並べられていた。それは発掘者によって「組合物」と呼ばれている。

ところで磁山遺跡は発見当初から現在まで、集落遺跡とみなされている。床面や炉や扉が全くない2個の大きな土坑が住居とみなされ、他の土坑はごみ穴と貯蔵穴であり、「組合物」(組み合わせ物)は食糧を加工する道具であると考

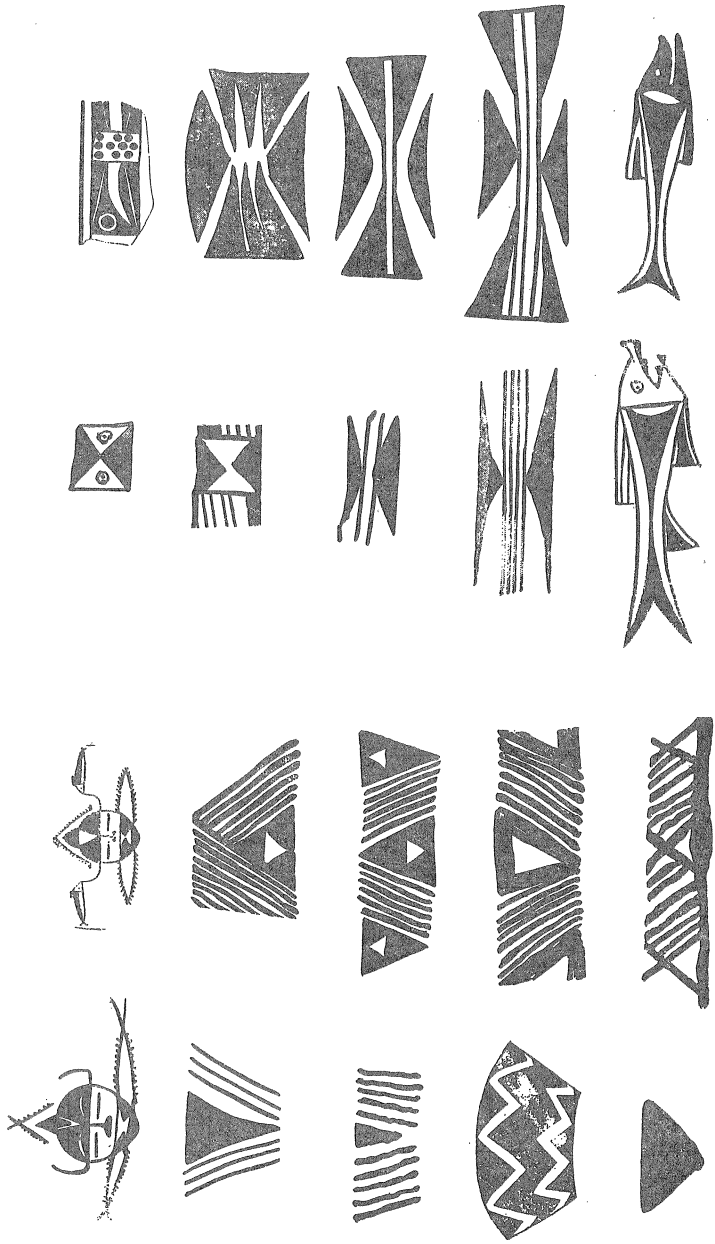
えられている。しかし、なぜ住居から遠く離れたところにまでそれほど多くのごみ穴が作られたのか、また貯蔵穴ではなぜ犬や豚の骸骨が農作物の下から発見されるのか、さらに一般の集落遺跡には見られない「組合物」は何を意味しているのか、今日に至るまで十分に説明されていない。

そこで私は磁山遺跡を新石器時代の祭祀遺跡と考える⁶⁾。すなわち中原地方の集落遺跡では、一般に住居と土坑の割合が1対3ぐらいであるが、この遺跡には住居や墓はなく、全部が土坑で構成されていた。そしてその土坑は祭坑(祭祀用の土坑)であり、『礼記』に見られる「祭日は壇、祭地は坎である」の「坎」の直接の源流をなしていると私は考える。「祭地」は土地神のための祭祀であり、甲骨文字のは「坎」(祭坑)を表わしている⁷⁾。また「組合物」は当時の人々の祈願の象徴であると私は考える。すなわち、石斧は勤勉な労働、磨盤は豊作、土器は幸せな生活を物語っているのであろう。このように考えれば、それは古代文献の記述とも結びつくことになる。磁山遺跡は、たとい東北方の紅山文化の祭祀遺跡と型は異なるとしても、中原地方の独特の祭祀遺跡と考えるべきであろう。

II 祭祀の方式

現在、磁山遺跡の考古学資料から推測すれば、当時の中原地方の祭祀の方式は、先ず土坑を掘り、儀式の途中で豚、犬、羊などの家畜を殺し、日常生活用の土器を壊して農作物とともにそれらを土坑に入れて燃やし、最後に土をかぶせて埋めたのであろう。中原地方の人々はこのようにして春と秋に豊作を願って大地を祭り、他方、東北方の人々は東山嘴と牛河梁のような祭壇を作り、豊作を祝って天を祭ったのであろう。ただし、いずれにしても自然の恵みを祈願する祭祀であることに変わりはない。

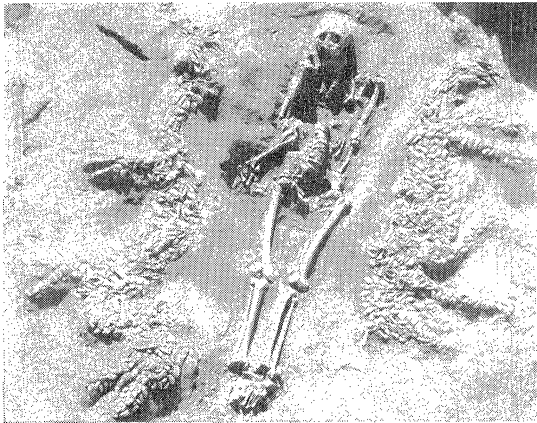
また新石器時代には祭祀を司る専門的職能者がいた。例えば、半坡文化の彩色土器に魚と人間の絵図がある〔図版四〕。魚の絵図は2種類に分けられ、1つは写実類であり、他の1つは抽象類である。この2種類の絵図は年代が同じ



〔図版四〕 半坡文化の呪師の髪形と2種類魚紋

であるだけでなく、いずれも黒頭と白頭に分けられる。半坡文化が分布していた渭水流域では、白頭の魚の絵図は西安より西方に多く、黒頭は西安より東方に多い。半坡文化の人間の絵図も黒額と白額に分けられ、それは決して偶然の一致ではないと考えられる。また人間の絵図は魚を耳飾りや首飾りとして、特殊な身分を表わし、『山海経』に「呪師が蛇を耳飾りとする」と記されているのと同じである。従って、半坡文化の人間絵図は、当時の呪師であったに違いない。そこで半坡文化の魚や人間、あるいは黒額と白額の区別は、半坡人のトーテムとして用いられるだけでなく、当時の部族組織を表わしていると考えられる。さらに半坡遺跡では人間を画いた彩色土器が特定の住居の付近に集中して出土するが、それらは年代が異なっても出土する場所と状態が完全に同じであるので、半坡文化の呪師は世襲制であったとも考えられる。このような半坡文化の魚と人間の絵図は、現在の中国少数民族の彝民族にも見られる。彝民族は現在では黒彝と白彝の2種類であるが、古くは彝民族に黒頭虎と白頭虎という2種類のトーテムの伝説があった。それは半坡文化の魚と人間の絵図の意味を理解するのに役立つであろう。

半坡文化と同時代の黄河流域では、ほかにも呪師の存在を示す考古学資料がよく出土している。河南省濮阳县西水坡遺跡の第45号墓⁽⁹⁾〔図版五〕には、墓



〔図版五〕 濮阳县西水坡第45号墓

主人の右側と左側に貝で竜と虎の図型が見られるが、アメリカの学者張光直氏は『抱朴子』『説文』などの古代文献に基づいて、この墓主人を仰韶文化の原始道士あるいは呪師と論じている⁶⁾。その結論はいま中国考古学界の共通の認識になった。そして祭祀職能者は、半坡文化を継いだ竜山文化では急に裕福になる。例えば、浙江省余杭県良渚文化の瑶山祭壇⁷⁾と呼ばれる祭祀遺構にある祭祀職能者の墓からは、日常生活用の土器だけでなく、多量の精美な玉器が出土している。これらから判断すると、祭祀職能者の社会的地位と権力は一般人よりかなり高かったに違いない。

祭祀職能者は一般に中国語では「巫師」と呼ばれ、その中で祭司、呪師、シャーマン、占人などいろいろな名称が使われている。普通に祭司はある程度発達した共同体あるいは社会の祭祀職能者を指し、呪師あるいはシャーマンは小さな単位の村の祭祀職能者を指すとすれば、半坡文化の人間絵図に見られる祭祀職能者は呪師あるいはシャーマンと思われ、紅山文化のような大規模の祭祀中心地には、社会あるいは共同体全体の祭祀にたずさわる祭司がいたと思われる。良渚文化の祭祀職能者は言うまでもなく祭司であろう。殷周時代の祭祀では、世界を天・地・人三層に分け、祭祀職能者を媒介として、上が天に通じ、下が黄泉に達したことが、甲骨文字によって明らかであるが、そのことが現在では新石器時代にさかのぼって考えられるようになった。

祭祀職能者が用いた祭具としては、新石器時代には横笛、太鼓、磬などの楽器や、人骨、円筒状土器、彩絵土器、日常生活用の土器、権力を象徴する玉器があった。また生け贄の習俗も見られた。

生け贄の問題についてはいろいろな解釈がある。かつて、中国考古学界では半坡遺跡第1号住居の床下から出土した頭骨を個別の現象として問題にしなかったが、後にはこれは殺された人間の頭骨であり、捕虜であるかもしれないと推測された。最近の研究によると、半坡文化集落の中心広場に埋められていた多数の人骨は、祭祀のために殺されたことが判明した⁸⁾。仰韶時期の河南省濮阳县西水坡遺跡と紅山文化などにも同様の遺物がよく見られる。竜山時期になると、このような遺物が急増し、殷周時代には生け贄の習俗が頂点に達する。

新石器時代には同族あるいは同じ部落から選んだ人々を生け贄としていたが、殷周時代には商人が同族の生け贄を少数に留め、多数の外民族の捕虜を犠牲とした。このように生け贄となる人々の身分の変化は、社会発達の里程標となっている。

なお、中国新石器時代には以上のほか抜歯や頭骨変形などの特殊な埋蔵習俗があり、宗教的意味を含む耳飾りや玉器などの遺物が多く出土しているが、これらの問題については省略した。

Ⅲ 祭 祀 の 類 型

現在の考古学資料によると、中国新石器時代は大体3時期に分けられる。紀元前5000年ほど前の前仰韶時期、紀元前5000年から紀元前3000年の仰韶時期、紀元前3000年から紀元前2000年の竜山時期である。またそれらの文化の特徴から見れば、5つの文化圏に分けることができる。すなわち東北地方が円筒形罐、西北地方が彩色土器、中原地方が尖底瓶と三足器、長江流域が鼎と豆、東南沿海地方が印紋硬陶を特徴としている。おそらくそれぞれは多彩な精神生活と祭祀活動を行っていたのであろう。

そのうち特に注目されるのが中原地方の祭坑と東北地方の祭壇である。前者は黄河流域を中心として前仰韶時期から登場した磁山遺跡であり、仰韶時期の河南陝県廟底溝遺跡、陝西省商県紫荆遺跡を経て、さらに殷代まで連続的に発展している。後者は仰韶時期の紅山文化として登場し、竜山時期を経て、殷代晩期にも至っている。その分布は、いまの遼寧省の大遼河流域を中心として、西は内モンゴルの包頭市付近に達し、南は現在の浙江省に至る⁹⁾。この2種類の祭祀形態は大体漢代までに合流してしまったことが、『礼記』など漢代の典籍に明白に現われている。

中原地方と東北地方では祭祀の内容と対象が異なるため、その具体的な方式も道具も異なった。東北地方の1つの特徴は、日常生活用の道具でなく、専用の祭具をよく使うことである。例えば紅山文化では主として底部のない円筒形

土器を使い、普通は祭壇の上にきれいに並べ、祭壇の周囲を向く外側にだけ彩色した。

もう1つの特徴は、このような祭壇と玉器の分布が完全に一致することである。東北地方の遼河・大凌河流域、浙江省の付近では祭壇が発見される一方で、多量の精美な玉器が出土している。これに対し中原地方では祭壇に日常生活用の土器だけを使い、円筒形土器と玉器のような専用の祭具はまだ発見されていない。もとより同様の土器でも場所が異なれば用途も異なる。従って、土坑で構成される遺跡では、そこから出土する土器の性格を確認することが最も重要であり、その性格は、道具の特徴と遺跡の構成およびその環境によって推定しなければならない。

中国の新石器時代に、黄河流域を中心とする中原地方の文化が農耕文化であったことは、生産用道具だけでなく、集落の形成と遺跡の構成などから断言することができる。半坡文化の集落は幾度も発掘されたが⁹⁹、環状の集落の中央に広場があり、広場の周囲に住居が分布し、貯蔵穴や炉や粟が発見されている。成人の墓は、集落の外に血縁関係に基づいて区分されていた。それは1つの独立した経済生活の単位であったことを明示している。東北地方の新石器時代の集落の特徴は、住居が東西に並んで、貯蔵穴が住居の中にあり、中心広場その他の遺構がほとんど見られないことである¹⁰⁰。かつて、東北地方の新石器時代の文化を農耕文化としたのは、その集落遺構によっている。しかし東北地方の新石器時代の集落は、夏季と冬季によって移動するので、同じ集落で生活する期間は短く、遺構の種類が単純になった。この地方では農作物がまだ発見されず、よく発見されるのは粟、クルミなどの野生植物である。花粉孢子についての研究によると¹⁰¹、この地方の古代の生態環境は採集と狩猟経済に便利であった。要するに、東北地方の新石器時代の住民が農業に従事していたことを示す材料は非常に少なく、逆に採集狩猟についての資料がかなり多い。その中で最も注目されるのは、細石器の狩猟用具である。従って、東北地方の新石器時代には、少なくとも採集狩猟の割合が、半坡文化のような中原文化より大きかったであろう。その後の漢代から明清時代までについて見ても、東北地方

はやはり騎馬民族の生活の場所であった。農耕文化の人々はもちろん土地を熱愛し、採集狩猟文化の人々は自然の賜わり物を大切にするので、それが祭祀の方式にも反映しているのである。

おわりに

中国古代の祭祀は、今から約7000年前の新石器時代にさかのぼることができる。当時、中原地方と東北地方にはそれぞれの生活環境に応じた経済生活の類型に基づく伝統的祭祀形態があり、天を円形、地を方形で表わし、埋葬習俗の方位観や世界を天地人三界に区分する古代思想も、新石器時代にさかのぼることが明白になった。

中国古代の祭祀は、内容が豊富であるばかりでなく、その影響は現在の思想および文化と密接に結びつき、中国数千年の文明史の中に重要な位置を占めている。しかし中国の研究はまだ始まったばかりであり、今後、中国および外国のさらに多くの研究者がこの問題に関心を寄せることを期待したい。

注

- (1) J. G. アンダーソン『黄土地帯』松崎壽和訳、六興出版、1987年4月。
- (2) 王克林「試論中国人祭和人殉の起源」『文物』1982年第2期、1頁。
- (3) 郭大順、張克挙「遼寧省喀左県東山嘴紅山文化建築群址発掘簡報」『文物』1984年第11期、1頁。遼寧省文物考古研究所「遼寧牛河梁紅山文化「女神廟」和積石冢群発掘簡報」『文物』1986年第8期、1頁。方殿春、刘葆華「遼寧阜新胡頭溝紅山文化玉器墓的発見」『文物』1984年第6期、5頁。
- (4) 河北省文物管理处、邯鄲市文物保管所「河北武安磁山遺址」『考古学報』1981年第3期。
- (5) 卜工「磁山祭祀遺址及相關問題」『文物』1987年第11期、43頁。
- (6) 于省吾『甲骨文字識林』中華書局、1979年。
- (7) 濮阳市文物管理委员会、濮阳市博物館濮阳市文物工作队「河南濮阳西水坡遺址発掘簡報」『文物』1988年第3期、1頁。
- (8) 張光直「濮阳三鱗与中国古代美术上の人兽母題」『文物』1988年第11期、36頁。

- (9) 浙江省文物考古研究所「余杭瑶山良渚文化祭壇遺址發掘簡報」『文物』1988年第1期，1頁。
- (10) 卜工「北首嶺遺址廣場墓葬的特殊含義」『遼海文物學刊』1990年第2期，45頁。
- (11) 卜工，同上。
- (12) 中国社会科学院考古研究所『宝鷄北首嶺』文物出版社，1983年。西安半坡博物館等『姜寨—新石器時代遺址發掘報告』文物出版社，1988年。中国科学院考古研究所，陝西省西安半坡博物館『西安半坡—原始氏族公社聚落遺址』文物出版社，1963年。
- (13) 楊虎「試論興隆洼文化及相關問題」『中国考古学研究·夏鼐先生考古50年紀念文集』文物出版社，1986年，73頁。
- (14) 孔昭宸，杜乃秋「內蒙古自治區幾個考古地点的孢粉分析在古代表植和气候上的意義」『植物生态学和地植物學刊』1981年7月，第5卷第3期。

—— 吉林大学考古学系講師 ——